

2022(令和4)年度

俳句講座 句集

— 第3集 —

講師 倉科繁登先生

(長野県俳人協会顧問)

塩尻市中央公民館

目次

春・夏・秋・冬	……	清水 勝子	1
阿吽	……	長 泰裕	3
指切り	……	樋口 芦笛	5
青い空	……	五条 さと	7
老猫	……	赤津 勝広	9
春光	……	掛橋 庸子	11
雑煮椀	……	山崎 政子	13
福寿草	……	田中 覚重	15
夏の雲	……	和 美	17
梅の香	……	成瀬 綾子	19
無我	……	宮腰 征彦	21
霜の花	……	檸檬 椽	22
月のしづく	……	中島 ゆき	24
養花天	……	塩原 しほ	26
はこべ	……	かやの	28
ローバイ	……	杉原 宮子	30
老犬	……	飯田 正孝	32

春・夏・秋・冬

その一

清水勝子

天井の雫となれり犬ふぐり

紫陽花や風の重さの色を足す

追憶は若葉の奥にありにけり

夏椿散る時風を放ちけり

空蝉の声一つ置く石の上

春・夏・秋・冬

その二

清水勝子

天高し湖一枚となりにつけり

霧湧けば山脈きしみつつ動く

一滴の水のふくらむ初硯

大地凍つ命まるめて鴉とぶ

花びらの虚空もつれし桃の花

阿吽

その一

長 泰裕

ひそひそと阿吽の仁王臙の夜

霧ヶ峰青葉ぐもりの影連れて

薄暑光ゴツホの杉の目指す天

夏燕水面の影を振り切りぬ

落蟬の青空抱けり無言館

阿吽

その二

長 泰裕

満月に太古の地層波打てり

夜もすがらとほき汽笛と霜の声

裸木の蒼空すこし引き寄せぬ

寒月や太郎次郎の眠る屋根

子の言へぬ想ひあれこれ石罅玉

指切り

その一

樋口芦笛

地の息に息を合せてレタス植う

朝刊へ日差しが届く濃紫陽花

行く春や嬰子の言葉一つ殖ゆ

蛇穴を出でむと風を聞きをりぬ

植樹祭霧が雫となる帽子

指切り

その二

樋口芦笛

指切りに鉄の風鈴鳴きにけり

月一つ置き忘れたる山の湖

蔵の灯を早々点けて鎌祝ひ

秋高し泉を抱く遺跡村

秋空へ二連梯子を伸ばしけり

青い空

その一

五条さと

初空やはてなき海へ広がりにぬ

君在りし名残りの山に桃の花

月冴へて信濃の列車照らしけり

崩壊の地に眠る君リラの花

山吹や万葉集をなぞる夜半

青い空

その二

五条さと

星月夜白馬たたずむ森へ行く

客待ちて紫陽花色の服を着る

人去りて田ごとの月は輝けり

雷や忘るるなかれ戦火の子

雪投げの子の声高く青空へ

老猫

その一

赤津勝広

革靴の結び目緩み夏隣

薄氷の一枚剥ぎし朝戸風

沈黙の山の意思なり木の根明く

水鉄砲内なる澱を込めにけり

落日のささめきごとよ青田波

老猫

その二

赤津勝広

一天の青にとけゆく熟柿かな

老猫の薄目の奥の愁思かな

大楓天の端まで彩をおき

静寂のオリオン父となりにけり

青写真すこし大人になりし日よ

春光

その一

掛橋庸子

福寿草門出を祝ふ灯かな

白髪のライダー連なるみどりの日

空コップ光そそぎて夏来たる

青萩の髪ほどくごとと風過ぐる

分水嶺月は海へと流れゆく

春光

その二

掛橋庸子

生まるるも死ぬるも一夜天の川

けん玉の一瞬の技秋澄めり

海猛り波の花飛ぶ佐渡の道

厳寒の蓋をさされたり土の息

春光や千本格子続く街

雑煮椀

その一

山崎政子

風呂敷に春を包みて押すチヤイム

誉められてなほ色染める桜かな

鯉のぼり泳ぎ疲れて休みをり

蝉鳴けり命といふ字放ちつつ

物言へぬ茄子に鋭き棘のあり

雑煮碗

その二

山崎政子

白球や火の玉と化し夏空へ

雨止みて指揮者るるごと虫鳴けり

鰯雲真つ赤になりて鯛と化す

乳飲み子の少しブカブカ冬帽子

雑煮碗中に輝く景色あり

福寿草

その一

田中寛重

あそこにもここに咲きし福寿草

日脚伸ぶほつほつ畑に人の影

咲く時期を記憶してをり七変化

這ひ出して今ぞとばかり蝉時雨

一庭の濃淡競ふ百日紅

福寿草

その二

田中覚重

梨貫ふ幾何学模様
に箱に詰め

金木犀色で引き寄せ
香放つ

小春日の歩みゆつくり
回覧板

鈴生りの取る人もなく
熟柿かな

寒の夜の頭潜りて耐へ
にけり

夏の雲

その一

和美

梅雨晴れや満艦色の濯ぎもの

犬の尾の散歩をねだる梅雨晴れ間

稲妻の一闪闇を深くせり

九回の裏の奇蹟や夏の雲

秋草の露命をつなぐ吾夫よ

夏の雲

その二

和美

耳澄ませ霜の声聴く夜更けかな

マスクなほ疑心暗鬼を生みにけり

掌に命のぬくみ寒卵

薄氷の漬物桶の屋号かな

万作の風に戯れ陽に踊る

梅の香

その一

成瀬綾子

長閑しや足取りしやんと八十歳

黒猫のピンクの舌やさくらんぼ

猛暑日の展覧会やサプライズ

満月や宇宙旅行を空想す

秋深し百のフルーツ勢揃ひ

梅の香

その二

成瀬綾子

黒猫も魔女に変身ハローウィン

夜空一杯テノール響かせ熊祭り

日向ぼこ老婆と猫の寄りそふ背

日めくりの脱兎のごとき歌留多会

梅の香や今日の抜歯を和らげて

恣我

その一

宮腰征彦

お嬢さん口一杯に鮎を食む

真夜中に地獄の叫び虎落笛

メール待つ今日一日の冬ごもり

寄鍋を前に二人でウクライナ

慎太郎逝きて一年梅の花

霜の花

その一

檸檬
様

片恋のグラスに氷柱割り入れて

風光るカヌー競技の声満ちて

こころざし国境越ゆる天の川

泣き虫の笑顔に変わる雲の峰

青空を飲み干してみむソーダ水

霜の花

その二

檸檬

襟立てて修司の街は冬ざるる

人生無計画墓石に霜の花

リラの香の陽はゆっくりと落ちてゆき

あかあかと春塵の丘土踏まず

魚島や一塊の海ゆらぐ

月のしづく

その一

中島ゆき

花冷や芝居小屋跡杭ひとつ

小児科の窓折紙のこひのぼり

うりずんのもどかしき日々半世紀

森となる孤雁の生家青嵐

独り居の月のしづくと語らひぬ

月のしづく

その二

中島ゆき

十字路をそつと渡れり秋の風

まつたりと熟れる無花果夕日影

甘辛き年越し鮭の粕煮かな

寒明けし時代ときの流れの憂ひかな

憧れし十五の春の弥勒像

養花天

その一

塩原しほ

からうめの全て下向く養花天

河馬の子の父を真似たる朝寝かな

音の無き時こぼれゆく春の午後

梅雨滂沱母の葬儀は終りたる

ひまわりや戦争やめてのプラカード

養花天

その二

塩原しほ

学び舎は連隊跡地赤トンボ

蕎麦の花段々畑は天までも

霜の花地球は並べてガラス質

我が身より去りにし乳房冬の風

料峭や日本すでに戦に入る

はこべ

その一

かやの

リラ色の翼ひろげて札幌へ

一面にひろがる落や雨の音

暑き日や声はじけとぶ河原の子

夕立ちを風が木曾から連れてくる

鉄塔や夕焼け背にうけ天に立つ

はこべ

その二

かやの

稲架は阿吽の呼吸夕日背に

と旨さまでもう一霜の漬菜かな

背のびして甃むしるや寺の鐘

黄金の唐松の冬音もなし

粉雪にねこの足跡朝一番

ローバイ

その一

杉原宮子

地熱上げ田畑肥える猛暑なり

こいのぼり風を食べても元気なり

えさやるよコロナ飲込めこいのぼり

蝉鳴かぬ移住先が決まったね

願い込めあじさい寺の鐘をつく

ローバイ

その二

杉原宮子

月旅行もちつくうさぎは夢となり

寒くても背中**の**ばして空を見よ

春なのに油断大敵**す**べる道

ローバイや香り届けて友を呼ぶ

春が来た山山越えて野にも来た

老犬

その一

飯田正孝

冬初めもうぽつぽつと街路灯

山肌に注連縄刻む大浅間

老犬も散歩控へる寒の朝

月映す湖面を弾く光の輪

ずっしりと甘露ためこみ梨届く

老犬

その二

飯田正孝

縄文の民と並んで月仰ぐ

夜勤かな明るき窓に蝉特攻

供花たちそろって下向く暑さかな

四片咲く山のお宮の道しるべ

まんさくや枝いっぱいに目を覚ます

おわりに

塩尻市中央公民館俳句講座の句集第三号ができあがりました。一年間の講座のまとめとしての句集です。

一人ひとりの顔や性格が違うように、一句一句の俳句にはそれぞれ違う味わいがあること、また、助詞をひとつ変えるだけで、俳句の印象も大きく変わってしまうことなど学ばせていただきました。

この句集に受講生の皆様の足跡をしっかりと残していただき、また新たな一步を踏み出して行ってほしいと願っています。

本講座の講師、倉科繁登先生には一句一句について丁寧にご指導いただきました。その成果がこの句集に集約されています。この場をお借りして感謝申し上げます。

令和 五年 三月

塩尻市中央公民館長

赤津勝広

俳句講座句集 (2022年度)

第3号

2023年3月31日 発行